

2. 永平寺跡板碑

位置 (第40図)

この板碑は、日田市大字高瀬字松葉に所在し、高瀬川左岸の河岸段丘上に立てられている。この一帯は高瀬川に沿って北に向かって扇状地の裾が広がっており、全体としては幾分の傾斜はあるものの概ね平坦な地形となっている。現在はこの地区には基盤目状の整然とした条里地割を見ることができるが、こうした地形を利用して古代から中世頃にかけては本格的な水田開発が始まったことが推定される。現在これらの水田は高瀬川の上流より水路を引き、そこから水を落としてまかなっているが、中世以前についてはどのようにして水路を引いていたか、その状況を知る手掛かりはこれまでの所わかっていない。また板碑は地元の人の話によれば、周辺の土地を開墾した時に発見されたものと現在の場所に移動したようである。

現状 (第41図, 第42図)

板碑は、正面を東の方向に向けて2基並んで立てられており、向かって左側を1号板碑、右側を2号板碑とする。



第40図 永平寺跡板碑位置図(1/5,000)

1号板碑（第41図）

安山岩系の堅い石材を用いて加工しており、首部は三角形を呈し、額との間に二条線を掘り込んでいる。幅は額の部分から塔身・基礎付近までほぼ均一に整えており幅約39cmを測る。基礎部分は加工を施さず、自然の状態を保ち、幅約45cmを測る。また全体の高さは、基礎から首部の天辺まで約98cmを測る。奥行は額の位置で約15cm、基礎の位置で約22cmを測る。文字は額の下に約35cmの大きさをキリークを刻み、その下には三行にわたって、

願主沙弥回 右為先孝先妣 應長元年八月日

の文字が彫り込まれている。この文からこの碑が応長元年（1311）に沙弥回という人物によって亡くなった母のために建てられたことが知られる。

2号板碑（第42図）

1号と異なり凝灰岩の軟質な石材を用いて加工しているが、形態は1号とほぼ同じで首部は三角形を呈し、額との間に二条線を掘り込んでいる。幅は額の部分から基礎までは少しずつ裾広がりとなっており、額の部分は約86cm、基礎の部分で約108cmを測る。基礎は1号と同様に加工を施さず、自然面を残している。高さは中央付近で二つに折れているものの現状で約194cmを測る。奥行は全体にほぼ均等で約20cmを測るが、額の位置は少し長く約24cmを測る。梵字は額の下に約60cmの大きさをキリークを刻み、その下に文字を彫り込んでいる。文字はまず板碑の右端に「大願主 珠貫阿」という人物の名が見え、その左側上段に

光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨

と推定される計16文字の仏教用語が表現され、下段は九行にわたって

奉為 念阿聖 靈滅生 往生極 樂填證 菩提也 □乃聖 法界平 等利益

の計25文字の奉書文が表現されている。

これらの文に続けて左端には「正和二季 十月廿日」と彫られており、この供養塔が正和二年（1313）に珠貫阿という人物によって建てられたことが知られる。

まとめ

永平寺の起源は『日田郡司職次第』によると、保元2年(1157)に当時の郡司職であった大蔵永平が、婿の三牟田盛季に夜討ちにあつて暗殺され、その子の大蔵永俊がその霊を祀るために建立したとされている。板碑周辺には多くの五輪塔をはじめ、水田の中には永平寺と関連のある礎石と見られる石材もそのままの状態で見ることができる。これらは子孫の手によって代々守られてきたのであるが、天文17年(1548)に高瀬氏が高瀬合戦に敗れて以後廃寺になったと考えられている。

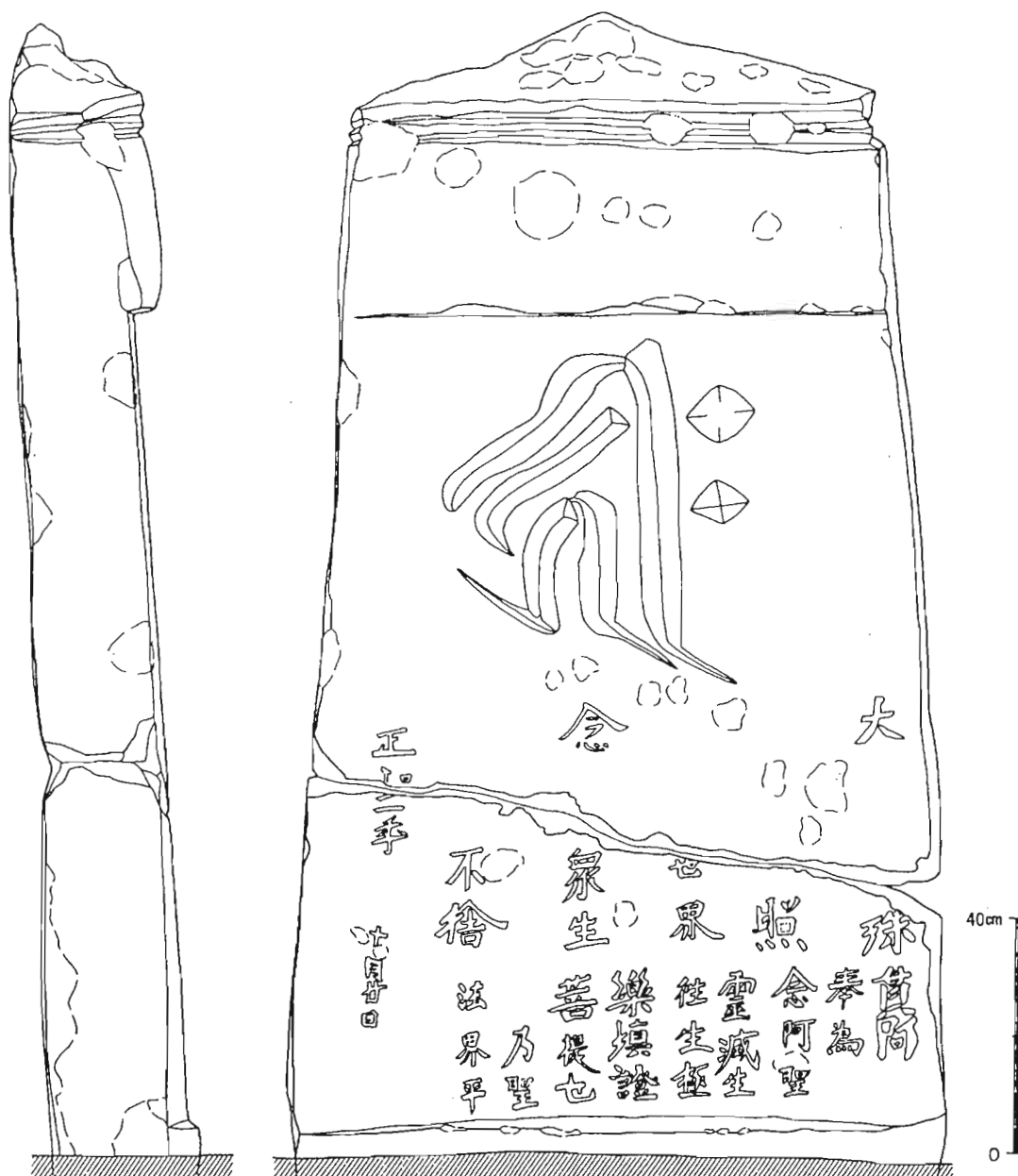
参考文献

『日田の文化財』 日田市教育委員会 1984

『日田金石年史』上巻 日田市教育委員会 1973



第41図 1号板碑実測図(1/6)



第42図 2号板碑実測図(1/12)



永平寺跡板碑遠景



永平寺跡板碑近景



1・2号板碑正面写真



1・2号板碑側面写真



1号板碑正面写真



2号板碑正面写真